極
樂記

# 農業

中里西内記

此書ハ養蚕植付の法より別より一法を三回ゞ肥耕作して壱石ゟ弐石弐

一粒百倍

# 稲代稲

全

皆ゟ作るべき所の法より
別仕様ゟ作るべき処の法
建ゟ作るべ稲の御を考ル

穂ま穂

家内の男女と称ひ事

農業所要の日一年の内おゝて三十二日ゝ又月
麦刈の日八日田植の日八日秋耕作の日八日
苗の日八日都合三十二日ゝ天氣ゝ良ゝ納植付
耕作仕事ゝ時ハ三年のあ十分ゝ力を勤ゝて
後ゝ時ハ一切疫作麦刈ゝ日ゝ後ゝ麦畑ゝ
例年田植ゝ日ゝ後ゝ植付ゝ秋耕作ゝ

日に後れて根を苅ひ麦蒔けりと後れて稲刈げ
なるゆゑ百姓ハ此のゆゑ行あとに日ハ
仕るゆ一日一人作指なふ者やらはらかしこ人こけ程と
とるぬよハ行ゆ共同ど百姓よるしくまふいそがしく
何のなし殘やりても第九日雇の和人をあく我も沢り
あまこと思ひなるこ此殘よ乃ふ麦ゆ一の側わりまづ
家内のとれよ殘ゆ此の指又年何又
如ハ何又或ハ一日何分の指り故ハ元和中麦たこ

みな百のふそふしくおゑよやらもとさげく存く粉く和
元田よるまはるハ早ハいてきて起夜ハ夜中まで
今ハ体もせだたくも吸ず縄沢り働ハ人みくも三人
おハとるみん紙ぐ家内みん人わしぐこみゆみ人お女房ふ
城なゆ一ゆ人の力ともつく勤む繕ゆ沢ひ中て
数ゆ百貫の米殘と約且如房出ゆやりたる
殘ハ年貢信の外と出ぐ先をたゆ使といふ
あしこハとるのしれ如だあしぐいるわぐ働ゐても

麦刈るゆゑ麦なくなりて兵糧の思と成ゝ心のまゝ
収ること仮来入ること日雇賃高くなりて
百姓もひん困となり女房あんとをつゝれおもの
意あるべし

綿やうて麦間のうれなるまをつくハ
田植 麦蒔 綿乃耕作

を他の意

綿ゝを作で湯ゝ湯ゝとを作の稜枝張り



なり 性色ひの稜ハ茎ゝびの稜ハ白色をけ
まを張るものゝ中ハ植るのふハ植あんとの時を
ゝ肥耕作一日ゝ行ゝれ過るゝ
べきもゝがさ一をけまで他もあるゝて空虫
二年後の年ハ水もゝ引で植あくかんを作れば
性色ひ茎の糸綿の揚ものゝ
肥耕作一町のものけるく他も出るく空まゝ
稜の年ハ茎ゝ糸を引ゆく出る成ゝ訴も

すらうれ農業をふるはざるもの婦も出て働く
さしづ毎のくはけをとるものあるハあるべきもおしよ勢よ
国が出て来る貢国の代弐貫国ばかりとて
ばかりとなるの下をとるみ年ばかりいとく完米ばかりいとく
作ずを大なる源りく我よ換あれば彼ものを言ひ
来ばを清つ縁のをはなれて行をハまりまるべし
沼和換をとるかくとふ格くとや町下三反ハをとよ
百丁も船ものり知下三反ハて安楽よ暇世

をとりの百丁かくハ金の世話するをとてこれみ
概ね是上例ばかりのもの
町下ハ耳ふ船くもをとへをよ
見をとめをとび言をとり
大半丸蓋
百姓の先金牛ふあり一てびはくハ時ハを金数十
年ふなふ清くハ時ハ沼金よ出ハ清ハひをり田
なるをとは清けをとば庭のふうを出てはくをとへ人あれ

それハ牛きひの口脇之深く引時ハ骨ハとる時ハあゝ
引面ハ丸くなく骨して切ふく深く引時ハ骨ハとゞ時ハ
わく引面ハ丸くなく骨をひて きらるゝ深く引の横横深く
なく深く引と清く引と其毒ひゆく物の如き其毒ひ
くゝ中く一反こ拾日に拾日のよわゝ秋
つゝび深く引ハ麦ハ白倫麦年の麦ゝの たゝ
つゝび生物寒熱ハ赤く上田地ゝ上老人ハ
一すゝくもふくなくきゝ牛と求ゝ哭力

なゝさ人ハ中弓ゝく哭足をゝく白ゝも一弱苗千
ゝ弱ゝ牛の足ゝも稽ゝ
熱作のゝゝとあ きハつゝぎく
牛一之の強弱ゝあ

老牛

牛老て麦ゝ中ゝ牛ゝあ村古ゝ清ゝ
ゝ老ゝ貴ゝ一月の後行ゝ年房
牛ふ麦ゝ死ゝ牛の行ゝと弱ふ

其牛穢多の手に渡り女房子共死せる日と同じ
日の同時に殺されたることは、昔物語に牛ある八先祖
乃山王を祭りたるといへり。又其恩あるをわすれて殺す
是を大悪しらずして牛ハ百姓の先祖にてあるなれば
之を悪む大之徳ある若き時ハ心のまよひ年寄る
とも善人ハ誠に大悪之人ハ今に叶ふあまりて
大切するといひもする牛ハ死といはずに去るべくとも
いかなる八種なれば肥も為よのあれど知らずして

損もなし村々にハおゝくの飼料迄飼ふ人もあれバ既
道具を積とるを一乃安んずべく
んずや。角あるときハ突あるべし
としよりし牛穢多に売るとハ

## 男女上物

男女給銀よかくらうバ佐をうつ切出してよく働き給へ
らうバ給せバ力の給さんをかくとくべし百目
やるべき給銀又百目やりても損ハなし況や又百文もれ

ものあるべきなり又拾匁より六拾匁のまし給ものを
一年より朝ハ一日ものを銭ものの繰のみて仕るべ
極りなし 綿い切ものの米竈とあるせけるふ
くどの火の点りもさみ付くく 第もいるべもつく
ものを合わせて仕るべ 稼ものより又下より出る
めるすくどハつく 砂糖る 第ハ多く入るあも切
合はせ仕るべ 郷ハ一切の仕る 結郷のもし
或ハ一日又ハ七日 稼ある人ある歳ハ一日又ハ七日



豆ある人あり 綿ハ十人きふ日雇の間ものを人
あれハそれ 号さ十人あく働く 豆人 結ものを
雑 又みものを人 又あ きを人一人あれそれ
十人 結ものせば 豆と十人 倒ものを或い
なるべ時一 紙乃 米さみく 行石ものふ 豆とる
事あり 豆 結男の 豆ものふものを 上方 細工人
高人 ものを人の 結 綿百 目ものを 貫 目 百 目
ものを人 ハ 身上 稼みふり ものを 目 ものを人 ハ 家

ちゑと違る百姓のまろんも永劫のごとく
殆根ハ一銭うてもたんとやまを
男沒収で加地子百信

農道之

農道之孫嫌ハ勿論を外まんがりつと極極
いるこざ物ても百姓こまを極んを十分よ個ふべし
百姓こまけまバ貴ハ文ばかハ百姓あて殆倍ける
面白こまをまぎき仕るも能こまを百姓



あけまバ貴ハとる均ハ百姓ど苦で迫あけれバすぐき
仕るも後迫まこまやめこ百姓の銭一日の割
きこ文ゝ武文仕るも物益極る臣去乃上ゆも
銭文者のちびのこまてハ仕わるぬく信こ上農吏ハ
農ゝこと〻くすこ

借銭と貸ふこまくを貸たまく
百姓こまを沒収て仕事上信

御年貢

御年貢ハまく納べし 此之ニ持あがるも身上仕舞
ハ貢まく納べし 納ざるもの村ふ
まく納るもの三人納ざるもの三人 ハ
まぐ浦ふれもるさよ皆海上を為を尋ねけれ
言て云 綿ハ二千ばり米ハ車べ三ばり蝋さふ
まく納べし 綿ハ千ばり米ハ車べ三ばり蝋さふ
有まず 米ハ五ばそすべ 此の内ハ
為けるハ又云かうべふ

まづかく水ばりれ眼おみ有ふ但せいやうよ稲の
前ぶ耕作ハ耕ばそ焼米ばんまい
ばんハ仆の弁まく眼おの孫とんて小ひ孫よ
乳をあと夜くハ少て小孫とひ拳白ま
ハ粒とこ孫ハ米俵こかしあ兄弟ばれ
貴二恵ハ眼おの孫とんく孫ばこもい
かるハ又百目春代の二ばり式ハ加ばい
眼おみとんくゆばば百目やばば百目やる

是百日の干ばつ日々に枯のゝ〻世ゝる海人の
わゝびゆりく干ばつ氏陪でいる〻歩陪の業れハ上るも
なれどさゝるもあり年〻そつて拾貳ヶしかゝゞ
つゝし小ゆんゞつゝし魚あゝゝあのゝ〻けハ極めて
魚〻と人ハ一弗人ハ一行つまる雨ハ一正節季乃
動定いすれゝ乾坤の書入まゝれゞ
蛇ゝさふゝくお納ひと芸ふ又納めゞゝこ人ゝ在やゞ
さいゝくすれど及ゝく稼ゝ間の如居ハあゝゝ仕せて



著る小児ハ望ゝ前ゝ形ゝふゝゝくハ海人ハゝゝゝ
芸ゝ季の動定大あゝゝれまづ池田ゝ賣げめ
ゝゝ身代持ふゝ虫人今年の業ゝと鍋と入まゝくゝ命
石炭ゝ方ゝ方ゝまゝ下ゝく来るハかのゝ人ゝ在ゝ
ゝ〻ゝ苦ゝゞ海年貢ハゝく納ふゝくハゝ
ゝく納ゝゞ下ゝもゝ収ゞ在ゝもゝげん口ハゝく
身上ハ持あゞる芸ゝ利ゝ金ゝ
海年貢ハゝゝゝゝゞゝゝゝ

夜のてぐるハもとれぬるもの

## 蜆蛤

世のなかに蜆蛤ほどあさましきものはなし
蜆蛤すきのもとは初めハ塩ひあるほどよくて後
塩乏みをもとくさくなる雑魚あるも悪
敷て物いくぬる俗ものもも腥臭みあるハ悪成
かきるもいれども悪敷ものんかん
も腐ると烟は移し作物ハ稼敷せんか



是昭を如房うかんしやく起すを猫之と鍬の柄は
以ものもとくら働き村の人が西日十郎礼いて
つくると仕ハめくくゆりまきうあるの人家
しくも七寸ほど縁と八寸ほどとるる口腐さ
ぐ解ぎよ油糟と賞夜ちうをなる秋起
あくりこるしぬ乃ぬ寸ほ綱湯ら働らは外上
持ぐらる眼ぬ水ハ俗ハ田地地も求ハ
もて物じ也ハ兼西口せ一性悪も乾ハく

門うち等殿とめぐ西白せうくんは中よ
あやまち入る風情富ぶん生養の縁をうん
ちと熟しく後の稽こてらけき
よの人ぐ程といつる歩こうセ
お田のうまれ程もの事ば

陰地の本

登補まうれ本くも之本心の本うても地陰と
なる太いはべ仕人の地陰となる本い伐伐べー

門年貢納なぐら豊をうて稽あをバけを側ぐれけ
注死ぐおと思ばべきよハあぬぬも物彩あ者け
なるを又思ふまぎあもいのび人の本ゑしいわど
殺ぐをくも思は伐てまハれいひぐなぐんの
中よのを物をふ

地の地乃陰となる本ハうをまく人
いくでくむ稽を

地境

地ざうい潜るを与とし女一人をえらび取り
災ありうるを忌び福あるを悦ぶ時
来乃巣を往て見まくこそ
三人皆雑よあふこと三人の娘人三人の娘をもち
けるふこと娘入して後彩の間果てやみうん盗人
止るをく後くして他の畑の絡を掘絡よ鍬炮して
歩殺を生ろう又三人の娘盗人るに及ん拾石持ろ
ろよ和性根ちくぐちちちち三年を経て

家業歩仕舞後大坂へゆききんちやくゆくかたち
駄よ人よ殺さしめろこと又三人の娘盗人さる百姓
さうろう時殺ぶ人よ極ろごろう人よりて首絞
ゆよのせうら是皆娘を侵せ一乗の難ひ為しても
恐ろぐきハ娘用海仕ろよ人の地と盗は百知ぢくこ
義し又濡よ濡姫のとき他乃地とかけぐけろろ
いぐらしかろしひこ三人のうとをんて誅ろまで
滅ふ君語みわろ次

姫君ハ侍あんとそらるるもの
天のめぐみ
まつぞり作

こゝろ〻〻男源切なるなまろ人よ七とろ和歌とて
仰らすべしてこの男ハ小さきの幾やうゝ答ひしも
或ハ気も付ず紙こまうけてもとろハ仰らハ思ひ
一日くとそし孫よしやうび幾るけ思ハ新れ和答み
出ゝ幾なの和ハ今ハ夢り且こゝ答ん恵性の程こする



まつぞり仰さすしゞ幾あるゆ花いろるもるく且
幼女のこゝ仰と考ひ自明試こ受て成人乃
後考ゝ同年ハ三仰ゝ宮ゝ考ゝ考ゝ仰るよら
仰ゝさす別よこるを極めゝ作ゝすゝ時ハ
こゝひあるてゆこれ程なる又ちるされ小人る
幾やうてこゝ考ゝ考ゝ考ゝ考ゝハ勇弁あるく
お恵ハ働ゝけゝも潤澤なるりるハ急くハせあ
これ分こゝ時男女こる皆但幾こゝめ使り

姫君ハ世ゝの人とゝまとゝろるまじく
天のめぐみ深くこゝろ高ゝ
まつぎり作

こゝろよこゝろ男源切なる人の世とゝろ和歌とて
作らせすべて男ハ小さの幾やうを器ものしも
或ハ気も付ず紙ぎれ付てもゝろハ物ゝハとゝひ
一日くとゝし強よしやうび幾るけ思ハ新れ物ゝ
ゝ幾のあハゝる美目ゝ思ゝ恵性の程ゝる

まつぎり作さすしく幾あるゆゑ尤いつるもくく且
幼女のゝゝ作と云ゝひ自現或ゝ受て成人の
後ゝ貴男ゝ三作ゝ宮仕ゝゝ幾ゝ作るゝ
作ゝさず別ゝ二ゝと極め作ゝすゝ時ハ
ゝゝひありてゝゝ程ゝ文ちゝさゝ
幾ゝゝ美ゝゝ美ハ勉弁ゝゝ
ゝ恵ゝ働ゝ潤澤ゝ幾ゝハ美ゝハせゝ
ゝ作ゝ時男女ゝ皆但幾ゝゝ使ゝ

往古ハ竹文侍るとするふハ行う文字より一文ハ行う文銭くく
するまハ行う文を銭と集め壹男ハ元服びんつけ
小路を女子まで揃めんけいかく買てやうかへき
ふかゝら偽に買てきらく換ハなりし党をだまし
徒らしといふその小悪人もだまされて是れ侍るを
あるまでだまされても文字なり
子やまよまつぞり撰りくゝらさせ
絹も仕なりひ塗物もなく

## 飢饉しのぎ

飢をしのぐ粥雑炊ふうまれハ如なして人の命
を水を沢山に入菜類を煮て塩升く菜とし
足されど米を増薪やさ菜ハ野らの摘て其外
銭入らく一日三合に夕百目の米ふして三人の命
足とまる六十日ふ積れは九斗なり九斗にして三人と
立九斗の銭ハいかほどかかりても求めらるべし稗
粟の粥雑炊やすし然れば則ち飢にのぞむ時ハ

有徳の人の飢るハ是人倫のうるさがるまく一升の米を乞ものとて白米にてえめうとて加つる麁服ふ
米つ升一升此米をあるうどしめるうち又飢るうぶ
麁ごく飯ハ粥ごすいとり稗を入て麁ごく
入ゝ豆ざしを水を焼あるうかて紙へ自然
飢ごもこそんの年ハ人ごのあるごと分る始末て
一飯ゆせば世界をしれけれ洞ひ飯人参み
稗をうり人参みもも故ふの人の金を一飯て

粥ふ清水人の金を粥ふハ七堂伽藍と紙ろみも
稗ろしゝて

こそんの年ハ人ごの自然ゝ飢する
粥ごすいで参りごもゝ

休め地

休め地も一の益ありくゝ田ハ乾ぬかぬ出来ほど
ゝしども及て来十分一作ハ麁もの紙ゝ稗ゝ麁もゝ
作ハこもの作ゝ稗ゝ畠ゝ巻の翌年紙ゝの濃ゝ如

を地好く作こなる田へこなる麦のうちも又
こうり作めゆゑ又の稼はあり一ハ沼地をゐ
加高作の実入十分と待二ハ力を用ひずして
沼作一信三ハ地ゆゑ地ゆゑ
あるべ地の作をかしけの畑干場とし
又ハ畑のこ口捨土焼土場とすべこなるべ
乃ゑ唐ハ多く作めゆゑ地もるゆゑ古文曰
文く作て地力人をひらこれ作めゆゑ

麦ハ十分一米ハ二十分一武ハ夏
毛を作め武ハ大根蕪麦を作め武ハ畑のよ口
ちかた田を作めて捨土場とし先も作べ
みくハ拾ひし作めゆゑ作くハ多ハ出る地を
かゆきまして石地となる作めゆゑ地をて田を作
すると其ハ一刻沸せゆゑ作ゆゑ牛ゆて門前
肥多く入る後牛其わゆゑ考ゆゑ
其其ゆゑ地ハ乾くゆゑ作ゆゑ

くゝて肥となり苦肥も肥焼土湯も肥地の
焼ゝも肥也へる故作大ゝゝ続ゝゝて年
こゝろし地ゝゝしゝて百年肥いゝゝゝ

休め地ハ茂くゝゝゝてほゝゝゝも
ちハ焼るゝくゝゝりなりゝゝゝ

地道

地ハ丈夫ゝゝすゝゝゝ地人のゝるゝゝゝゝく
丈夫ゝゝすゝゝゝ是陸海ゝ地ハ丈夫なれゝ棒あ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ泄魚の気安ゝ分宝ゝゝ
ゝゝく見て一荷ゝゝゝゝ荷ハ二荷ゝゝゝゝ
地ハ懸ゝゝゝゝゝてつくりゝけ
作も痛まずゝるゝゝゝ

悪水めき

悪ゝめきの薄丈夫ゝまゝゝゝゝの地を惜ゝ
ちゝくす小利大損ゝゝゝゝゝゝ地も乾ゝ
中歩もゝゝゝゝゝゝ中ゝゝゝゝゝ一作荒ゝゝ

深く入れまぜ地ふく乾くべふく中地
天気の時畑をとろす事をして作物すなわち
畑の上口四方に溝ちんさけをば多く時畑を
流す事作あるのゑ永くの雑しなる
金山のかりこせんとう溝をかし
かりもいるなりんとも乳味は
地ごらく
想じての植えものハ地ごらくちるこ年まで深く

ちりふく肥を入き植ふくく家道もくぐれ紙して
畝道も切り一ちと三月に移れかくして後植尾張大根の
二年一苗を江戸八幡牛房に間切かして苗は余ら
地ごらくとくくし多く肥を入植ふるかなり
他の植物皆切のごとく中植八年ふてかれぬのかな
こと植ふくくぐれ足まく踏くぐれ実道の枝張り
なくたとくちんあって後植えさすれば生ふ
生ぬの気をひなく細ふなるかな

たゝく種を色こ十粒蒔く十粒出る三度ひ仕すて
日ふも水も痛まぬかりかけ出る縦出くを
そぐちがきハ桂柘のそまつなるかと種柘塊乃
間ふゝさまゝく風ゝ入蒔時るゝとひぞ
或ハ塊をかぐつくゝ出けぞ縦出ても去あゝきか
根をひゝゝを日ふ痛ゝ乃あよ痛ゝゝ色く雑よあゝ
桂柘之地ぐらく去まなり
ゝひまけよ絡のゝひう

桂柘数くゝずゝ
桂柘数桂るハ換なり又一ゝ中大豆と桂稈と
ゝ何の辺よハ付ゝ宗多ゝ糸桂く稈柘多けまハ
乳納の世伝ゝゝも格別乃送作一度桂て海づゝを
二度も三度も桂て度仕て海づゝと三度も異
ゝく牛を借ゝても一度借て海づゝと三度も異
かゝゝ仕よ付てハ或ハ塊を踏あひひゝ牛よ
かまし乳実れ辺ハ去てすゝ利とひんと

弥せば何のなくも一品ハ二品作るべし反毛ある書く
種とう秋毛なり稗と稗とうさすれば肥耕作ハ
納め何ハ造作もなく畑をあらすもなく牛
おもかぬまぬ米立一倍ハ実の辺ハ及て多し
其ほ遠小肥ごらくを或ハ牛ゐ糞を拾ひ或ハ
けづる或ハ山芝を刈り或ハ藻をかる是ハ百く
銀ハ酒一品作るものハ米を儀みて砂糖作る
うんかやくも他ほ味噌醤油作るものハ反く

刈上倒るゝが如くあらゝ是バこちらをゝづし
一ものゝ二ものゝず稗よあ稗とハなりゝけるゝ京
大坂乃細工人何ものも一品作る價易して利多し
田舎の細工人ハ一人ゝて数品を作る細工ハ高直
ゝゝゝく書く稗よちゝ数作るゝ作るぬゝの
稗豆腐のごゝ

柱ものハたゞ一品とゝぐむべー
ほろひま入らぬ反実一倍

中ぶハ能く折ふ志くハなし中ぶハ第ぶ麦の
根なきごとも水しも第ぶ麦のふわらぶハ分ハ
ちと乾さんがゝ為く麹ごての作り物ハちを乾うたが
第ぶ畢竟の畢竟の麹作るもの湯がおとしも焼土灰ちを土の
肥しなるもちらく乾るが為ぶちらく乾て毛を毛ゐよ
麦のごとく土庇のごとくなるまゝ根忽さしらさる
麦を以て作る物湯がゝしされど百日のひてりを
さらしもハ干ねとも水に浸ぶりても中ぶせざれど

大地の為気あがりくちハ乾るゆえ中ぶすれど
陸をるふ入大地ときるまちらく乾く麦中ぶハ
麦の為ぶ水ハ為ぶハ分ハ麦物のみく思る麦乃
中ぶ能く歩重時ハ肥なくて麦物湯がおとし
若麦の中ぶ折ぶる時ハ作ぶ肥を入ても麦物
出来ぬゆえ麦物の中ぶ能く歩も来年の麦為ぶ
耕作の耕ハたゞやとし鋤を刈中ぶのるゆえ
中ぶする日志ご稼ぶ志つけを歩時ハちゐぶりく

けつ沈毒あつぐ毒あかずあつ泥濘働き
天気ハ晴ハ日ハ赤ハ地ハ雨ハ赤ハ
ちつ毒人ハ原くハ日の毒ハ殺すハ
細ハ乾くハ乾くハ陰ハ作ハ
又人毒ハ切ハ絹ハ一遍ハ細ハ
わ毒ハ毒ハ事ハ
ちの毒ハ

中ちハ毒ハ乾くハ成ハ

肥の入様

鰯 油糟 を人糞肥ハ
草ハ肉肥ハ焼ハ
草ハ地肥ハ
草ハ水肥ハ
草ハ乾肥ハ

ちも肥石も肥石と肥とするハあれ共ねぶる金附ハ
地の動きとなりて肥ふるとうるもと抜あおり迎よ
する肥ハ石肥の外行ふくもよ地乾きうる附ハ石肥
うしきあり石ハ肥ハ焼土肥ハ
肥うしかまれとき地ありうる附ハ石肥ハ地抜て
後ぬぐ上肥ハ土ハ行ふやちをぬよおせまぐれ
風ふく夏ちと打附ハ土抜ふなりて中あるもたら
上肥ぬぐれ苗の中ふりて中附ハ石肥

ひくうハ行ぐやふ中の附ハ抜後ふ乾ハ出ても急日ふ
痛むぬよ後ふ石肥ハけくふ作り抜
大なりて後ハ抜後ふ乾ハ出ありてもたやちく
焼ふるやたぬ中附日ハ痛むぬ方ふ水肥を
かくるなりぬもふ苗ふ中ふくうし抜かけて
抜よ後ぬ苗抜ふ抜ふ物ふ物ハ上ふの方出なり
こすふふかくふく肥ふ中ふくふ物ハ苗ふ痛
ふくふくうがふ後ふ附ハ苗ふ乾ふ

大根を多かる時は多くこれを煮て使ふ少分にても
かくるときは根を生ずる他の根を生ずるものあり
どもそれだけの毒はまぬかれじ肥ちの肥ち
どこみてもきくこと薄ちすきまでめさわげてうねふ
かくりみな年こそかはらば苗はたくさんのまはあ
用ふ行要なり紙は裁ぬれ肥ねこけ根と去て
入る時は大なる苗を植ゑる時は根をとりて入る時は
あくまで痛しかの如し

肥は水ぬれ時ふ油ひ・すれ
すくて出りても日ふ痛むこと

苗をくる作る
稲の苗は匂場なるよりたくさん種蒔かしても苗を
くる作るべし作のしあり苗の一こうの赤は年
そぐつこの苗ちひさくても後は大なるこの歌は
三十日の内十日は中ふ苗は植ゑ植ゑ
仕業この苗作りこと作る苗大なるこそば

とぶ第三の秋のこゝろ
ひまなば根をとりて日の病みつゝ
孫よりそれ取植よ仕舞て苗を植るに地
二十人分一よりたゝず行わざ念入て植るの事
肥を入て後かしに出りみる毎に肥をかゝる
是も第一まめよかるらしすきまふうけ
根より源をしらべ時にまびきて

うえて後刈稲の苗だる鶴ゆ[illegible]おく[illegible]
麦作のこと
苗一ぶれ[illegible]
うえて後刈
麦ての作りあハ[illegible]
田植の歌程ハ[illegible]
めでたさ[illegible]
うえて後刈市[illegible]

ふる時も又まぢかくあらく刈時ハ未だしもすくなく
実のつきおり粒よくふるくとも苦うして味よく腹乃
為になる事遠かり
刈ときはくさもはなはだしく刈べく
来る年も多くつきてあり
田のこえ拵へ
沼田ハ冬季おこしひもちのよし牛の入ぬハ牛にて
踏ませ入ざるほハ鍬にて切返し百遍返せば

百遍の糞あるよし又しもの物を用ひ毎年おりおり蒔ちらし
むべし年々年を経てもとの実土のまゝ実と成
べき事なり又つぎにも入るとみえ実もこえ
なるもの鍬にて年々なしたる事にていへの土
十分入れて十分の糞地のすぐれたる地よし
まれにまかせ刈や苗牛にてふみつぶし
刈ばかりよく刈もとれたるあとにて土を乾し
其後牛の耕すくらひしもなるべきものなり

藁の上に稻ハ上に焼るゞ藁ちゝく焼て後水を入
ち所田おるゝ所ち所田おるれど根恩さ深つゝ
つくるゝむくらゝどろふくいちハ乾るめこ田へ
ぢくゝるゝとるゝ一遍引ゝて植る武ち
引ぢゝゝめゝく植る時ハ水ハ
麦なしめ肥入ゝく深くちゝ
麦ゝゝ山芝田ゝ入
ゝふ肥ゝ
ゝ肥ゝあゝ

田植ゝ山芝ゝ麦ゝ刈ゝ麦ゝ例のとゝ
ゝゝゝ引ゝ山芝ゝ入ゝ
ふゝ田を植ゝ肥ゝふゝ
麦ゝ蒔ゝ引ゝ麦ゝハ田ゝ
ゝとる時植ゝゝ

田ゝ麦ゝ芝ゝ
ゝ麦ゝ

刈ゝ

種おろしハ春分七十日 社日より梅ちりて凡さき
二月の中気よりまへに浸て五日ほど更に俵へ入置なり
ひきあげて芽の出るころ蒔べし 苗代の地すこし
廣く成て菖蒲苗ほどの時 よく水草をとるべし
入るとみぢんに切 ころしよく地のよしあしにて蒔さ
生て後ぬくときを云 苗のことく ちかき芽の
ごとくこれを作るなり
苗のときは すてたる事も多し

苗をたつる苗ハやくたい

## 苗代の塩干

蒔て後七日あまりして水を干て一日ほど日にあて
めくじ繩をもつてなでつけて水を入ても それにて漸くこくび
干あかる時 干や昔を浸て水を入 その時ハ苗じ
割去干すとき 八二月を限りとして干すべし 足てなるべ
つよし 寒干なれバ 秋のそのみにたまつて 根をよくする也
浸すことを入れば 苗根を打まくらし生めぐる水を

深く入れハ鳥に埋れまじわの雨ふりてのち
又浅くすれバそだちやすき為なり
苗しろハ毎年するが泄ひする
畦しハ鳥害ふ高くなる

若苗とりしん

田ハよく植ふをくなしよく植ざいよく実るなり
早稲ハ若苗 晩稲ハ老苗し 古来乃
定法なれども晩稲も若苗にて植てよし 晩

稲老苗とらふハ竹角に手をとれ 根ふく老苗と
なりたる晩稲ハ根本之日久しき故 老て植ても
若しうびよふつる 早稲ハ早くする中種をかて
住来の成り別しくつよく植ると掲り悦しくて
若苗ハ弱きくの足肥沖せて忽ちに老苗ハ
空くのはえかけちてまつてふそれをとるざるれ
農刈乃考くも苗深くいかに若苗ふさも
早稲ハ先へ植くるべし

まゆの作所にとりて植てこれを
あふぎてこれを日数かけれど

志ろ

代わりとなる地なりし志ろ畑なりしわ者もこれ
をもて日ふ病をひきて西ふ病をわすれすする
手むしりてもぐ面倒く繰の糸をといひ代を
そもつくれ志ろ畑が来まで植つげ出よ繰代わ糸
入とよも念を入るとひとり水をてかし蛭の

又面ごとふくこんのとりをきれ切ゆうを
作りの義兵ふしひきくんむしり
代のくさぐんとがあるかならば
苗とあるさもをを仕立せ
田ハふく植るとしくを
苗とあく附めくとをを植べし好者とあき金
領冷く植ゆ苗くをを移生おく
引あれで生をを失ひ是ををれけをて

めくとそれまき植る間ハ此乳と先ふるもたく蔓
のうまこるとそこで其後ふるとそこ第三又蔓を
切るとそこまあぜ植すぐ二人ハあぜを切る人ハ
植くゆく継ぎる植るぐらうたのしてもぐ間ハ
古株ぐら蔓の根切こどぐ又ふるとそこ
植ぐ二人ハ代とくき人ハ植くゆく遅うくる
ぐらうとたぐこお代と立たぐこの立て植る
たるのくこ古ぐまり足植ちの植る間

蔓ハ足植ぬこそ植る間ハ此鍬こてみぐらう
たぐしこ集り蔓とれまゆふ植こ蔓も
くこそ足植ぬ植る間
あぐ代と仕立すこ
畝こぐ植てゆけ
田の植板
田ハ植ぐきんぐ田ある植きんぐ田ふ

うすくてるとも硬くてるとも肥地いうすくてる
地いあつくてるのでし田を植ふまのてるのあり
一ちんたうとめてるあるて植るあり二ちん地のし
うげあるたうし三ちんあつて植たうし肥ない
苗ごしと植たうしあるちん苗と多ふまある
たうし古ちん足ないて植るたうしせちん沼田
深くてむたうし八ちん老苗たうしれちん荒
地あるたうし十ちん植たうあるたうし土ちん遠ち数

たうし土ちん稗あるたうし色ナシちん本のたり数たうし
ナたちん植田とてすたうし色ちんあるたうあ中田のちく
たうたうたうし一のたうさたにあ本の稗ありちん苗
たうき七ちん外の稗苗の作り田ハ植植あん
ぶいたすく石数とたうしんて植せば植たうく
植ごたうし苗のあぶ一苗三ちん一歩百かぶ苗たうくの
る立ちみアたうしんぶするあたうしんぶ一あぶ毎植乃
てたうのごくたうしんてもんあ植たうしくたうまこ来たうみ

百姓之文の云能せざる武石郡本の
換田あり和の牛つくり清ゝ換田元
三年肥と入多女の換田元三年武ゝ切りてゝ田と
乾ゝ田ゝ田ゝ田ゝの換田元三年 桂紙ゝ
のゝ女の換田元七年女井武ゝ田畑ゝ
ゝ女の換田元三年ゝくゝれて清刈ゝ武
刈ゝの換田元三年 郡合武石郡本 女井 切
ゝ女ゝ武ゝ本 切

武石ゝ武ゝ武ゝ武石ゝ武ゝ武ゝ武ゝ武ゝ武ゝ武ゝ
簡ゝ武ゝ武石郡本 武石郡本 加
是郡石郡本 郡ゝ武ゝ武ゝ武ゝ武ゝ
三十郡拾郡石郡本 武石郡本 女井 刈
田と家ゝ武ゝ刈ゝ田ゝ大ゝ武ゝ

稗ゝ武ゝ武ゝ武ゝ桂ゝ
武郡の王ゝ武ゝ武ゝ武ゝ
苗ゝ武ゝ

苗のぶり遅く成り或いは枯れる苗の株
金氏株某氏株等の株とする人の株の株かな
ものと思ひ違ひ天の罰しく
それあり諸人村の間に苗かして雑穀とする
ものもあるべけれども是は肥料の時のみで
是をする場合は且苗を植付する
なるのみなれども苗を植付する間
うるまでは是百姓の眞価なり

苗のぶり遅く成り或いは枯れる苗の株
人の株の株かな

田の草

田の草は粉にして植付後十日目
後十日目三度目に
法あり一度は中さぶ
ずけ差人をもつて
三度地ならし和ぐ
苗の株の草をとり

稲をやく事を田人事にするなり事とする
事をとろふわびに事を先とし
ある村に貧しいもの男ふ田のをとろすふ
と殘りをとりを付を殘をとまきちらしを拾ひ
もるものあれはわびしてはなしあつめてやりける
くぐいを拾ひとして泳ちを拾くぐいけるぐ
是は鶴くぐ事をれぐこをもつ利をを田の
事をとろい畑の中をすぐ稲をもれ泳ちを



あ米米はをの鍬くふ塩くを田のをとろは
上をもくををくををくををくをげをも米をふ四の鳥も
米をを拾ひ穴く這文さ田の稲は大を米を
事をあくくをいぬ田の稲は毒をを毛塩を
如ひ文の上農夫は生あををを中農夫は生て
後ごろ生ても下をぬは下農夫を瑠璃先生も
田の事百姓をれぐ百万石の富をひをいを
をれぐ日稲も四をぐ縄をふ米も倍を

あるなりけるをそぐ世のものとぞれとる事
はるばるのおりとるをそれを紙なるなり
をそれぞこそ事ぞ仕る道
こすのぶをはひろ躍し思ひのごとくもとれなる
はるばるをそれをそれを世話のものの歌の
病むをそれをたぐめをさぐすのをれ道理
たをそれを過をるをもるをいを過ぎを過をを
わるを田のをそれを過をを洗ひ西ひり来いなるをり

をを過をるふはをまをまをるを松ぬく一遍をなを
大体のをあをび光をを豊をを豊をを
来た一信をを豊ををり

田のをはまを一遍をおをあ
をれをををいちを一書

をり干

をり干はををはをををを干をを
松干ををををを海をををを

扨を落し晴天にて又は付置之乾きたる上ハ
又手をとらばて水引ある所の土をかきて一時ほ
刈しそれより葉がれあるを除ありて落ちたる株ハ
其の株へかくる虫をさらへ株へを入土度の
如し其度のかくかきば根廻りへ葉を入ながら
土をかきて溜田へ植る時ハ株ひく手ほすこと
又手へかゝ湛えを付て水引せ
又ことを手にかくなりぬる

夕立

旱つゞき水たらんもかねて溜稲田にかなくて
稲の葉縮るときハ外の水ハ冷気を含みて
肥も流れ来りて作りもよく其田ハ地
よく熟させたる也肥も無く流れ来る上ほの山の水
其のあん水し上りの稲かくもしく流れ来る水
時も花きと花もしかもどれなしとも水
稲十分のことなしかず上田ともなる

すべてもあやうくて油をする
夜のゆふぐれ稲の人参

うんか

稲にうんかの付くるあるとき入るべし
うんかの毛の毛ひとすぢあるをいふ
四月末比ひへ地にふりて出れるを
けしかしのもいふなり
又ものを深く入て去る夜油に合入毎に二つ



年ゆく虫蛹を出油をそそれて去く死す

水

秋田をする稲の深き後の稲のあるを
うるの時は落をつけくるのあるを
一時より手打べしく手時い入るのあるを
手しるの時は入れ
すべて稲のあるを時は田をせ
凡のあるなさ粕

うれく浦州

清水焼物いろ〳〵浦州ごもの物のこゝろ〳〵州
ゝく州よ沢ありけ時代ハうくわ重陽ハうくわも
ゝゝ州こづけたゝ切りひつ女拾あゝて州分か
行ゝも村ハ村ゝゝ文ゝ州ご六ゆも強ゝとゝ強よ
村廻ゝいけれゝ久波出ゝの物米ゝまゝ
あゝハゝ州の九ゝ州の物の物形ゝ〳〵ゝ蕎
物ゝ州ゝゝゝ実ゝでゝゝ書ゝ〳〵ゝゝ

ゝゝ味ゝく物の九ゝゝ遠ゝ市員ゝく
なゝハ百姓の物ゝゝハ米屋の物書ゝゝハ
関義の物味ゝゝ云の物後のゝゝ遠ゝは
男ゝ物物ゝゝ文百ゝ男ハ一郎ゝゝ人の物
さゝ知ゝゝ況や文穀ハ神の門ゝゝ
花ゝゝ実ゝ物ゝ人ゝゝ物ゝの
州ゝあゝめゝゝ州夫ゝ知ゝゝ
物州ハゝゝゝゝゝゝ

## 稲の十德

稲くゝ神のやどりまくゝ

稲ゝ十德あり一ゝ海くゝ川ゝ二ゝ谷くゝわりて地と
焼こゝろみくゝ植に三ゝ草ゝ沢ふゝ入四ゝ
田植の時くゝ地なしす五ゝ植ゝ念と入せ六ゝ
夕ぐゝ水とゝる八ゝ苗くゝ田の苗とゝるゝ九ゝ
干くゝ干十ゝ穂くゝれくゝ後刈十一ゝ
ゝ穂石の中よあり

稲中田の絶刈百牛ゝ引ゝ地と乾
ゝ麦苗の時と清
綿蒔てのゝ
綿ハゝ地文の不ハたゝ栗生て
地ゝ為めに苗く綿の上ゝ麦苗ハ植んと思ふ不ハ
ゝ麦苗のゝ麦ゝ地ゝ為めきの清とゝる或ハ物の上ロ
或ハ田のたゝの清いゝる清ゝ為ゝ
ゝ根ゝ丈ゝ又田の中ゝ地ゝ

おもきハ遠蔵よりきたる桔梗清をかまぼこ形にす
綿植の時ハ麦斜にまきて溝わかれぬ事へかけ川
麦蒔の時綿り虫とく五月綿ハ痛むハ溝ちれくれ
蔵凸高くしく水何おきも事へわかれ綿ハ日まで出と
噴ふうの事かしのなもとし來る根はを数れごく
かうて溝を綿りとて時ハ紙青なり綴りても
逆蔵よそうる事へ綿の根くされるをし一定あかるや
表忽般く中すもなく中すまる中すなれど

草ハ生ずるゆゑよく〳〵の蔵を心得へし

綿の地ハまづ麦蒔に溝をさらへ

わたのことくりし溝をたのむべし

## 綿実

秋田綿めきき綿として実をとり極月にあ
浮く志いるを去極上の実をとる事ハ文字蒔むすら
夏もし六畠を中もんし此世の人へ
生する物ハ生ても実ハまだ多いりまるの

月にてもあるハ植板のまわりを先
新ハ引わり根くさるを四ツ方ハ植ふちを
ぐんぐんぐさ念入て植るかしを
まぐさ九月ハ根ひ次ハ清水ハ
けをぐ生ハ後新ハ植わてぐん
くおくれ稲おけばまぐる陸ぐん
巣ぐる遅なり
稲あぐんぐん春夏土石月

植ふ念を入ハなりけ
稲ハ植板
稲の植時九十九夜より二月中ハ植板ハ
なり八月稲のくさるくさぬハ植板ハんぐい一ようり
古株植ぬ株として先中ぬして植ハようけ植ぬ
稲のくさる根元ハ植ぬすれぐハれたるあと
稲ハ根くさるハ芋が流義ハなるべ植ぬハせぬ
地ハ清を切て植ハ植ハ苗ハ先ぐ表の

中の道の数張りなく中歩してちとこらんようぐき
垂板植る時八植歩せぬこたぐ樋をて伺ごんもくぐき
ぶをて みこくぐき苗をとこぐくころ 地ゐよ溝筋
こう種をおろしたり苗多く撒ぶく植歩もる
時八ひいぐ鍬みて溝くけづを沿板樋をてこあて
地ゐよ溝を切植るこだる植るれぐだるいこうく
なしぐ三年彩種おろし時溝底を踏でこり
肥入る時溝底を踏でこり又別ゐ溝底と

踏ぐこりこくみこめ種をおろてちと蓋をて
後沿板樋みこくぐれよこ牛垂肥をこ地ゐみ
溝どころこ溝底をこみこむこ八地ゐ水を会せ
ぐれみこ地みを会八溝れ根くここ鋤すこく
こここ八ここ時八実肥ゐくこて生かみる田ゐこう
こゐ牛垂肥ここ八こぐれこ面こう地板みて
生かみる方こかく溝底を踏みこむこ面ここう
気こ植こ八ここ乾き地ゐ植ここ文こ丸

く生る地ハつまゝ桂もゝけそ後ゆゝゆゝの
ゐと紙ゝけづるをとる世話なゝ

ゆゝ桂ハ地ゝふる濃ゝ山ゝあゝめ

ゆゝの中歩

みゝ月ハ面をゝきゝの中歩する日ゝ稲ゝ
おつゝを歩ゝ近面ゝあゝ時ハゆゝ大ゝいゝむゝ
みゝ月ハ中歩をゝゝゝ麦刈や菅ゝゝゝ時ハゝく

麦ゝゝ例すゝをくゝゝ時ハゝ中面ゝふゝゝ大ゝはゝ
ゐるゝゝゝ面ゝゐゝゝく紙ゝそゝくけづるゝゝ濃く
歩ハゝゝゝ濃く歩時ハゝゝゝと合ゝゆゝの根くさゝゝ
ひいご紙ゝも常の紙ゝくゝも濃くけづるなり六月
ゝゝゝて後ハ濃く歩ゝゝ

みゝ月ゝハゆゝの中歩ゝくゝせゝ
ゝゝ麦ゝゝけづるゝゝゝ

ゆゝの芯

綿の茎ハ梅雨中も生ずれども苦熱すれども天氣の時
根気ハ強く伸る也作中にけいくきを取除て芽をつむべし
新芽の出るときハ雨ふりて茎を吹むしり地ハ出来かけると
茎ふるき也をくくり継てけづり過茎ハ継をのぞき
綿の芽ハよほどくらんら継をしけづる續よりなる
ことくけづる時ハ茎よりはなれく
左の茎にも必ずくよそうなるべし
朝ハ昼より夜ハ暁るまで



## 綿肥

鰯あぶらかすなら柱肥三斗二番六斗蒔肥九斗
都合壱石八斗右ハ古来の定法鰯油ハ麦のしつ
或ハたくさんくさと粉にして交田の黒八夫ほどにする
よくなるの用心なら小さきの時思ひあるたるは
頓く肥をかくべし生れ時ハ少し些一ち根深ミ入
忽日ふ病むかくよ肥をけくる浮ひとてぐ
朝りくる内ハ少し晩ぐよかくべし晩ニかくる時ハ夜の

[illegible]

出すこと有り肥ハ絹ぶんうすく有り回数かさねて拭かけて
拭ひ流すべき拭ひ流す肥をよかくること絹の
きつ元ゆへ

水肥ハ[illegible]ちかけて拭ひ流せ

きんようちゆうい敷ものこと

絹の水

洗ひ方ハ白用の中ふ入[illegible]かぶ[illegible]て白用をよ

白用の中ハ地ゆかくかさて毒
[illegible]白用をてハ秋ハ地朝[illegible]
ひ[illegible]上ハ乾[illegible]
水気ハ[illegible]秋ハ乃[illegible]絹の乗[illegible]

絹のハ白用のうちふかぐるなり

白用をてハ水ハ大毒

絹ハ白

白用をて仕[illegible]走り[illegible]

切てちひさなる木にもとて後ろなる枝をも
よく伐ふる木の枝枝すくなく葉ひ
ろうありてめしく伐る葉も青めうて吹めるを
後ろ伐ふる木の枝ひすくなく葉こまくこまくさ
吹めなり百ばかりも結めたる枝ばかりはつく黄
ありてもてどくうてすまして後ろ伐ふる木の葉ば
葉入てすして枝中なる枝木の葉ばかり
つゆ白拾ひ目ばかり葉ばかりて手ば流れ先ばかり

大小ばかりなる枝に周ば入を待かし延ばるを後ろ
枝のもめ拾ふ間ばかりまとりまけばかりもばかりば過ば
ふる大八廿二三枝中八十枝ふ八七八枝も肥の入を
かもん枝のもの行ばとば入合也是ばくば八葉ば実入や
君と考へくるなりさまれば大八葉多く黄ふ
しくまつると皆葉ばかりてもうかる枝ひ張る木
ばれば多く付ふる葉も皆おかまりふ小八和歌ばもの
ゆくかし枝葉ばふくふ入大ふ葉ば葉ばふく

とるも〻弾弓をれば一反百文目比三匁通切れハ
弾丸かぐるもを通弾丸合を通もるハ入る也ハふみ
ゆるあ弾ハいとめるを弾丸物ハ匁一通ハ丸と
ゆるも一通弾丸合二通入ハ也ふくさ
めぐ弾ぐ毛〻ねぐ弾もいとめハ弾ゆて拾を
皆ゆ弾〻〻る弾弓をれば一反百文目一丁の
作ゆ世目一歩けんぐ一反ゆ弾ゆ弾ゆぐるゆう
弾のゆまぐ弾のぐ〻ゆ

## 大ふ附ゆうくゆ

### 弾掛

弾ハ吟弾弓をぐ〻一切も待ぐ〻ハ作ふハ或ハ
毛ゆ弾を或ハ人ゆ望まれ或ハ面ゆあひ或ハ也ゆ
くゆう或ハゆぐふ弾ハ一切ゆ二切の物ハ肥ゆ
ゆう通で通ハ集る附ハ大ゆ集ゆ集ぐる附ハ紙も
ゆ一切作弾ゆ弾も弾ゆの一切ゆれハ一弾ゆ
かゆ也ゆ弾ゆう

綿摘ハわくふきたるも摘てよきに
塵がつもりてあしくなるなり

秋の中打

秋作くひいで時分ハ綿の中をけづり溝をかき
あくべし綿の中けづる時ハ来年の麦の種まし
土をよく砕きて綿のふきもよし又麦の為よし

麦

麦ハ竹きまくも一本植べし其中坊主なしにせよ

是ハむかし出来わきそのなれども其割合あし
作る時ハ大きに土をやわらげる也田植の前ニハ
なし雑草多けれバ取絶め干し役それハ是を能き
格別の違ひ土ふれるうきぬめりて田植ふ亦人る
一本ずれども作られぬる地より出る苗の細め縦きあって
鋤をよくこなして同じ麦のまゝ有れども細をよく添ても
植りなし土坊主ハ毛なき如く草なりとても
手ごろを入れぬ中なり

大麦ハ畑ごとに一しなよ
くすぐく植るハ秋ノ末なりのく
麦ハ苅ごとに九月ハ中旬ハ日ハ植初めを用
なるべき植仕舞ハ陰地ハ早く乾き地ハ遅く植る
陰地ハ乾き地ハ早く植ハ
かくいふ何ゆへ遅くかくいふる日乾き地ハ中旬ハ出来る
遅く植ハ陰地ハ早く植ハ
合むひ時ハ中旬の合ある穂を

刈る穂刈まて沒ばかりハ陰地ハ遅く植て
何ゆへ出来ハ日秋ハ陰地ハ遅く植て
陰地ハ弥乾ハ乾き地ハ弥乾ハ
根ハ出ハ出ハ生る十日もとに紙
出てもとにまかいとを植るとハ
一刈もよく植ハ植んとハ思ども
或ハ面よとれもつとハ植ハ麦植る日
くふつゞ稀心時家内のものと軽く張らられ

天気の時植仕事なり

麦植ハ多くをんぢとうくてとき

とくとくとれハ麦種もなし

田の方右の薄畑の上口の薄いろなる清みるも水

さくまぢた根仕なる丈夫とした薄たぶ麦みあ

のうるふるびる米年ハ反拍義ゑ綿のためなる

麦とれ綿の時ハ麦邪ノふなりて薄なれの

ゆへ麦蒔のとれなり歪なる

麦ハ乾とふ植るとうとうとあり気を植方とく

ゆづ加乾とふ植るとうとうとる日ちく乾さうる時

ゆうかむるかく旦乾きちるくいかとさいち

焼年ハぐ〜ち焼年のごくなるハ麦ハ根息

とうとうとくく麦ナなり出あり気あれハちと

ふうかさめ旦方ぐうり出ちとあて深こう

麦の根ハさず麦とふくく麦麦蒔

天気を新ふハ晴がるく保秋の日ゆうきものく

地ゝ乾くるを待て稗を播くべし地と
植ち用ゐ入中居又七月植付年植付年ゝ稗の種ハ
桑なぐめをてゝ水をかけ或ハ桑をとり来て植付
此時日雇もなくゝ人もなくゝ
牛馬ゝ人をつゝ畠ゝ
事なゝ此時泥深ゝ仰ゝ十分ゝ入ゝ
時植付畠年の麦ハ稗なり

何ゝ稗ゝ深ゝ酒と

麦のゝ植ゝ稗ゝ播ゝ麦ハ十分
ゝ地ハ牛の糞ゝ
平ゝ引ゝ
ゝ乾ゝ後植ゝ百姓ハ
ゝ地中麦のゝ
ゝ遠ゝ植ゝ
ゝ植付ゝ
ゝ植ゝ
ゝ麦ゝ
ゝ粉のゝ

紙ハいろ〳〵細ーしるかう

物ごとに種をうしハ人ら男のしかるべき麦又

ちう種をうすんハ地神に對しなるんてけ相

業をせはへと新合一粒に苗がひろく一粒の

づかゑるくたるあ正ハ実ねてまさ深をとる雲拾て

ちうをちんのむうなきさ物苗ごと紙のうしう種

をうしみ一まあり物ふ何の弟をさ小ふうるごよ

ゆうせ金うの大なる儒ふなり後よ種をうしに日

ふ汲ゆよあへで実入なうしいうを

種をうすんハをひよつきなうし

紙のうしう苗ハ混ぜハ

粗肥ハ鰯あるごかをうをい灰焼古乾を地ま

なるよる半屋肥ハをうを金麦八牛のひをい種て

いへで物をと麦を地を求むるも乃ごび反ハて

麦反八石までハ乃をいとう紙り物ずまこばまをん

一石よをごび肥耕作油ひまごうびをを出まて

かゝる例ありもあれども場をけがすを持る時は
そのきをひ決してかゝる
一反ふれて持地も無田も
例り振ふて麦は心ちど
麦小さき時肥をかくきつきふかるる色
麦の葉は黄ばみて麦はよくそるは行くは無よ出て
よるに入地は小さめるまめる麦は病ある接腐
小さき時そのかげみるくある時ちつさきそ紙

かゝる所くもあまきばかはかくるくさ色がけて
そのるくくもくも一日の中三度も肥あること
年間肥を過もあまきは生あるも
地あるは無はでるとそうゝ
小さくさにくさ色がけは
麦の中年間を過まるを過都人百十歩を出
天気続く時は何過の取張
歩くそのふの紙のこゞまとる所
ふく弱ち綱まるあり

もきのふ歩さとく歩ぶれば毎ふり終り
ほとゝれる女ハ撥うてくぐ〳〵笑も粉色くぐ〳〵とくい
なり麦の中歩ハ麦ハ刈ものふあわゝ麦ほ刈ものと
綿の刈ものと麦の時〳〵中歩して麦を結しとく
時ハ麦年の麦地綿肥なくて十分こ麦の時ハ
歩〳〵とゝぶれば麦ばかりして麦地綿行ばく
肥入ばくも麦ばかりなり
働き中歩すなり

中歩ハ麦ばかりふりでなし
めざ歩ハ綿と麦の
麦ハ刈りぶ刈とゝすを刈撥と條
後ハ田植の歌ものあ歩ば
人〳〵ハ刈ばく

刈る中〳〵刈ばく刈麦ひとて
麦万粒の撥法がある
麦ばかりハ苅ばく引ばく稲ばく牛屋ば

入もよし干て動物の糠く俵へ入て寒の内時は糠之
用ひぬ麦もし干て行まゝる
海に入れくろんに稲八十分

小麦

標播種は大麦と同じ大麦の半月程早く蒔べし

そら豆

そら豆は種子は壱反八石ほど年は蒔べし
営を出し種を[illegible]種を[illegible]皆其の年は

まるく播く種は空のの年ありても常のごとく早く播べし
つまる所は勝手なりそら豆と云の法あり[illegible]手まわる
入ればニつまり年は大豆[illegible]作つぐい
にも麦に先達て[illegible]年の[illegible]
地根[illegible]なる常に[illegible]種子之[illegible]蒔
さや[illegible]煮て[illegible]沢

大豆

種子[illegible]夏土用[illegible]八十八夜

二月ハ中ゝ
ちをみぢんにくだいて粒或ハ粒ゝくだき或ハ
皮をかくるくだき米通の粉ふるいて豆粉の
おくゝ粉後粒ゝ ちと豆ふかすと
大豆の中手のさゝふまくいる大豆ハよく出来る
ものゆへ中手とくゝ附ハ出来ぬ弓ゆへ是
ゆへ中ハ二ゝりて米の中手ゝ出ぬ中ハ
出ぬゆへ一刻ゝよく中手

すると大豆つゝく附ハ手たる地ゝ大豆の
米ハ出ぬゝ出るゆへ及び出ぬ中手ハ米ハ出ぬ
なりちいさき米ハ出ぬゝ仕事ゝて米とれる
粉ちり沼ゝ出ぬ豆と病人ゝ出るゝ事
粒ゝ出ぬ中手すれば米をゝ出ぬて
大豆の粉米ゝ
大豆の米をとれる世間ゝ米の代日雇賃ゝ
米をとれ村大豆を病ゝ旦那ゝ旦那となる

まくとれい沢の地やせる保そふるこて叶ハぬ時ハ稗別
大豆の沢ぬくこそ〻ら〻しかめてもとる時ハ沢ぬく
なりて〻まび豆ふく〻ら時ハ麦も風ることしげ生紙
肥とする豆地〻乾そ〻〻ぬ稗ちそ〻〻

粟

稗あてがいて五年苗時蕎粟ハ稗とをなじく
牡粟ハ田種と同じ
粟〻〻地まぬ大さ稗ハ信〻稗遠ゆめ



稗

稗ハ苗とを〻〻仕ぐ〻苗ハ考〻〻粟ハ稗別
なりあ〻〻ぬ〻ぬ時ハ〻ぬ肥とぬく

十要米

稗極米麻豆蕎麦荒紅花粟精芝と十要
米とふ
稗ハまび苗とを〻仕ぐ〻十月ハ稗極
植るハあ〻

燈芯ハ風ル病むこもの如風のあるあ面と猩猩る
なり茅るとつけよ苔茅るとき時よ猩猩振るとくと
ゆさとせる芯ハ風よ吹倒るのまぐきるのまんこ
古用の神まとゆるとれたるは之の入や雪と考て
大小つけよゆるともの作るつけ時ハせんごんのるる紙
粉ってひまりゆく又若芋とたるきみるかき
ゑくまぐ茅りて灯もるる
茅のしゆハ結燈あんどいてあり和揺る

時答よ入むして後下とる日ふ下ハるる日下時茅ふと
ひまりちぐむるこむまるこ通濃やいろゆゆく
人ハ方ハ灯茅燈と紙ゑ濃いるゆゆ物
答ハ下よ茅出と記しるるる出とうけて出の
燈ひ茅ふゆるるつげん紙よとあてるん
かしゆるい芋るぐるふるゑ茅とひ茅伝る
和ハ軽さ濃まゆる茅ゆ乳おゑまゆ乳出るき
よくゆげるこ日ハ茅ハ乳ゆけてねるいるよ

かけしるす凡めん類は麦とぶのくすり
飯所を丼にいろよかけ湯をたぶし薬を入くこ
ゑのごとくすりはいるるはきさまをしてもはなれと
なる法のゆゑ法及び毋波と名度とをしる法
皆ゑのごとし

二十番

大根を茶よりまんじ牛房芋さちさふぶん
そくりはふうろう茶ぜりあ茶つくも芋ふくまいた



さつまは風ささうも茶風さげ名ごく湯元ゆあ
色を茶にふ行ものくゆ作ゆ大ふゆ味也
尾張大根の茶一法を白茶八幡牛房切角切よ
くゆ鉢ふ作ゆ皆ばかり花のふ茶こ
わびふきくゆ作は大さ根のごくこう茶せう
くゆは薯とふくゆ味天麩のゑ
大根粒附二百十日漬くゆ茶ゑ飛と入ちとぐる
ぐ沢粒せくゆ後ゆ一ゆ毎ゆ飛粉ゆけて

根よ漬て代乃漬菜のあり合るもの

十加味

胡麻とうがらし山椒生姜芥子菊

とうそうの〳〵えを十加味とふ風味菜もつかび

あらくみわび菜に加へて風味とあり

とうがらしまたは時まつあるいは茗荷又茗荷

さびを塩漬とし風味

とんぶりはとけづるに成あふて夜ひとしおるけづて

日ハ所塩漬とし鮮漬とし赤の国漬是なり

まつてとうがらしみ巻塩漬とし日光の名酒

十菓樹

柿菓梨子梅梅杏樽枇杷くわんか金橘桃

もも十菓樹とうかの樹の実也けんも言ふ

人てもぐ〳〵ハ日漬とかりもんもぐ〳〵桃も

もぐ枝ものを借じ〳〵ハ庭の清〳〵美敷

泥〳〵

栗のもとひやりいつまでもおんなじ葉ばかり
かし候人をあてゝ切むいつともわくめちゝ栗ハ乾ぬと
去ゝ庚のあくふ夜ひゝしるものゝて日ふ干ゝく
乾ゝ湯向て悪くつく湯ばゝゝくさるゝ
梅干ハ仕様ゝ漬ゝる梅ゝゝゝ
乾ゝ梅ゝ年ゝ塩ハ年入或ハ生ゝゝ
ゝゝ生ゝゝて後塩ゝ入ゝゝ日ゝ合ゝ
又梅漬ゝいつハゝ梅ゝ塩の物ゝ漬ゝ

まゝゝゝゝゝゝゝゝと黄ゝゝゝ又花漬ゝいふゝ
梅ハ花ゝゝゝ小枝小二三梅ゝ付て梅ゝ
ひゝゝゝ漬ゝ花ひゝゝゝゝ
ゝゝふひゝゝゝ花ゝゝ
ひゝゝゝゝ生ハ花ゝゝ漬ゝる花のゝ

桜木の法

桜木の尾ハ山ゝゝ花ゝ
ゝゝ

はやく接ぎ木に繼ぎて年をへてけうかのめへ
果をなすなり実栽の意は茶の木へそそぎ
樹にはかをと意をしり利をはかるとこ
ろんぐはかを意をへ穂をこの枝穂をそのの
ぎりをはたらかすも枝のかく接へまぐり
ゆくれをのぶるを色まつ穂をへ諸の穂をのぐく
なるわり色を接付はきそのぐく接枝は穂の
かをそぐ流し意の法とけぐり肉肉けく

くるをくり枝のるを附はかあをを花らみく巻
ををを結を縄すりくかつ言をあくくをを根切口を
竹のは或はをくををひをを月意を結る言同
及て再び月意を成む

## 栽法の法

栽は八十月より二月をしを中是中ををしけば
なる附根をををけくなり根の病まざる御沢根を
信は色を根の迷をなて枯ものを枯へを根を

こうと或ハまつとの敵くの後風をかくれかぶる
為の用心又倒きかさ花赤ハ四方ちらかす花とをて
ゐ弄のごとして移あげ根とくるつ裏裁ち傷へ枯ぬき
ち花の上ハ屋くわらちをぢんそぶ松のあらざる
枝ハ引延しくの所ちをけ上あくめる裁て後多く
ちをかさを地のごくあ人後肥と入肥の入根をあれ
枝のもさを根とをわらくいかてもをくへうをく

[illegible]
ちよも民にうまれこのもとにかくけまを拾やすと
いへどやはりかきうの法をおもてすりくの
おほんをかくとうたもてなきく和りしく
蘭坊菊うえあり先んて面まのやうなりく
世ゝ伝ふ人ものかくしく

備中国小田郡大江村
川合忠蔵 元

# 近世諸先生著述

家集 物語 日記 註釋類
類題和歌 隨筆道之記類

詩文 經書 國史
俳書 狂歌 記録
石刻 法帖

正筆手本類
書画帖類
校合写寫本
類何出之
[illegible]

唐本
和本
古本

何書にてもこれ[illegible]
[illegible]の上多少[illegible]
賣買

書物所 大阪心斎橋安土町南へ入東側
河内屋和助

[illegible]格[illegible]
[illegible]
[illegible]